

# 生徒参加による学校改革の推進

－体育祭における構築・運営主体の移行－

助 川 晃 洋 ・ 坂 本 徳 雄

## I はじめに

1989年の国連総会において、児童の権利に関する条約（児童の権利条約、子どもの権利に関する条約、子どもの権利条約でも通用する）が採択された（1990年に発効、我が国は1994年に批准）。その条文で謳われている子どもの権利は、おおよそ生存（「生きる」）、発達（「育つ」）、保護（「守られる」）、参加（「参加する」）の四つに分類することができる。そして教育学のテキストでは、次のように述べられている<sup>(1)</sup>。

このなかで画期的なのは、4つめの参加（participation）の категория に属す権利である。

この指摘からは、重要な子ども観の変化が見て取れる。保護の客体としての子どもという近代（「子どもの発見」以来）のまなざしにとらわれることなく、また権利を享有する主体としての子どもという20世紀に入ってから承認されるようになった見方を踏まえつつ、さらにその上に、権利行使の主体としての子どもというヴィジョンが提起されている。すなわち子どもには、大人の助成的な支援や適切な指導の下、自らの意志で判断・決定し、自分の意見を自由に表明し、学校や社会、コミュニティに積極的に関与し、価値ある役割を果たすことが許されており、また期待されている。

しかし子どもの参加権は、これを21世紀的な新しい複合的権利とみなすならば、いまだ形成途上にあると言わざるを得ない。それに対応した教育実践のありようも、学習指導要領が規定する各教科・領域の内容に準拠しつつ、或いは現代社会の課題に挑戦する横断的な取り組みとして、例えば人権・同和教育や主権者教

育、シティズンシップ（市民性）教育、環境教育などの形で、様々な模索されている最中である。現時点では、定型的・典型的なものが存在していないことはもちろん、何らかの参考・推奨事例さえ容易には見当たらない。そこで本稿では、こうした不備の克服に向けて、一つのオリジナルなケースを取り上げる。具体的には、子どもの参加度合いをとらえるための最も代表的な理論の要点を押さえた上で（Ⅱ）、宝仙学園中学・高等学校共学部理数インター（学校法人宝仙学園の系列下で運営され、東京都中野区に所在する私立中高一貫校である。以下、正式名称を用いるのではなく、共学部理数インターの部分省略して表記する）の体育祭におけるイニシアチブの変移（言うまでもなく、教師から生徒へのそれ）をトレースする（Ⅲ）。

なおⅠ、Ⅱ、Ⅳは助川が単独で執筆した。Ⅲは坂本（元宝仙学園中学・高等学校副校長、2015年4月から2019年3月まで）が草稿を準備し、助川が加除修正を施した。

## Ⅱ 参加レベルの段階的把握

アーンスタイン（Sherry R. Arnstein）が1969年に提唱した「住民参加のはしご」（ladder of citizen participation）という図式では<sup>(2)</sup>、例えば都市開発やまちづくりにかかわる政策立案、或いは計画策定の過程における住民参加の発展段階が、次の八つに区分されている<sup>(3)</sup>。

### 非参加・実質的な国民無視

- ① 世論操作：行政の思惑を押し付ける
- ② 不満回避：ガス抜きや不満回避

### 形式的・名目的な国民参加の段階

- ③ お知らせ：行政から住民への一方的な情報提供
- ④ 表面的な意見聴取：形式的に住民の声を聞き置く姿勢
- ⑤ 行政が判断を留保：国民意見の内、実行容易なものを採用

### 実質的な国民参加・権力委譲の段階

- ⑥ パートナーシップ：国民と行政との協働、決定権の共

有

⑦ 権限の委譲：国民へ行政が持つ権限を委譲

⑧ 国民によるコントロール：国民による完全自治

そしてハート（Roger A.Hart）は、アーンスタインの見解を踏まえつつ、独自のアレンジを加えて、1997年に「参加のはしご」（ladder of participation）という有名な考え方を打ち出している。そこでは学校等での実践における子どもの参加形態として、次の8段階が設定されている（以下、参加ではなく、参画という言葉を用いたところがあるが、すべて引用箇所中であり、両者を使い分けているのではなく、大筋では同義であるとみなした上で、出典での語法に従っているに過ぎない）<sup>（4）</sup>。

非参画（non-participation）

- ① 操り参画（manipulation）：「はしごの最下段の例として、大人が意識的に自分の言いたいことを子どもの声で言わせる」。
- ② お飾り参画（decoration）：「子どもたちが、行事を組織することに少しも関わっておらず、主張をほとんど理解していない」。
- ③ 形だけの参画（tokenism）：「子どもたちを参画させる非常にありふれた形式であり、子どもたちは自分の意見を組み立てる時間が全くない」。

参画の段階（degrees of participation）

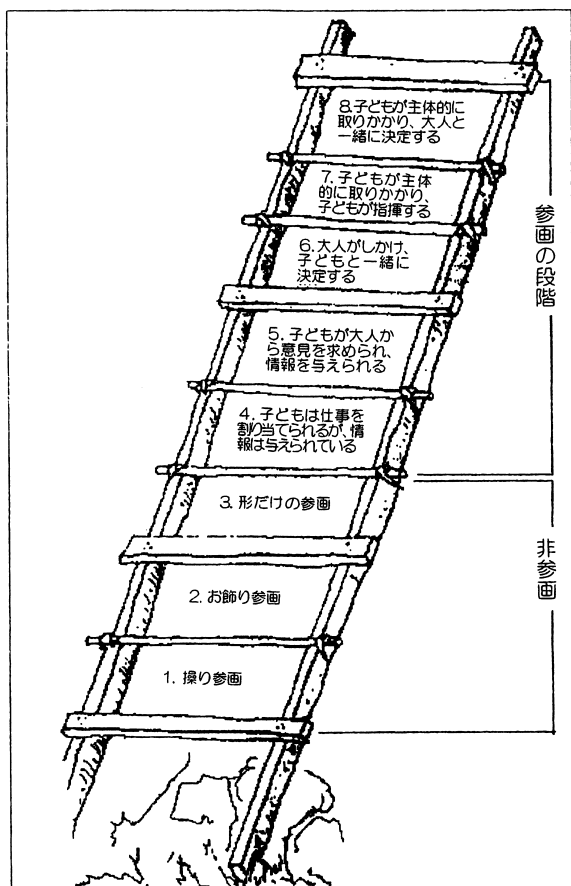
- ④ 子どもは仕事を割り当てられるが、情報は与えられている（assigned but informed）：「自発的な参画の最初の段階として効果的に使うことができるが、ごみを子どもが集めるといった大規模なキャンペーンだけでは、ほとんど成功しない」。
- ⑤ 子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる（consulted and informed）：「子どもたちがプロセスを理解し、意見を求められ、その意見が真面目に扱われるなら、子どもの参画プロジェクトと言える」。
- ⑥ 大人がしかけ、子どもと一緒に決定する（adult-initiated, shared decisions with children）：「大人と子ど

もが一緒にプロジェクトを達成するためには、子どもたちはある程度は全プロセスに参画する必要がある」。

- ⑦ 子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する（child-initiated and directed）：「子どもが進んで取り組む能力に気づいて、支配はしないようにするためには、特に注意深い大人を必要とする」。
- ⑧ 子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する（child-initiated, shared decisions with adults）：「子どもの言うことをよく聴き、よく観察することができる大人が必要である」<sup>（5）</sup>。

ハートによれば、①～③は、既存のあらゆる現場でよく見られるものではあるが、真の参加とは言い難い状態にとどまっている。それに対して④～⑧は、真の参加と呼ぶに値するものである。そこでは五つのステージが、上に行く（数字が大きくなる）に連れて、提案と決定への子どもの主体的な関与の質が高まり、量が拡大していくという意味で、縦に配置されている（下図参照）<sup>（6）</sup>。ただしハートの理論は、あくまでも子どもの要求や能力などに応じて、臨機応変に様々な活動を作り出すためのものであり、また多様な領域における具体的な活動への子どもの参加の程度を把握するためのものである。参加の実践をカリキュラム化するための順次性を表したり、評価の指標にしたりすることを意図したものでは決してない。

図 参加のはしご



生徒参加による学校改革の推進（助川・坂本）

### Ⅲ 生徒参加実践の展開

宝仙学園中学・高等学校は、共学部理数インター創立10周年を翌年に控えた2015年度より、「教師主体」から「生徒主体」への転換をめざして、様々な改革に着手している。富士晴英校長（2015年4月～現在に至る）は、次のように語っている。

生徒が主役の学校になるには、生徒自身が当事者意識を持って学校生活を送ることが前提です。そのためには、例え

ば学校行事は、生徒自身が企画段階から参画し、主体的に運営し、事後は総括して、後輩に伝統を引き継ぐという一連の行為が必要となります。

こういう行為を通して、積極的な失敗こそが成長につながるという、青春のダイナミズムを、是非経験してほしいと思っています<sup>(7)</sup>。

2015年12月14日に、創立10周年記念行事実行委員会（＝実行委員会）が、父母会代表10名、同窓会代表6名、教職員代表17名、生徒代表8名の合計41名で組織されている。2016年3月7日に、生徒代表だけを集めて行われた話し合い（「生徒実行委員会座談会」）の席上で、ある委員（高2女子）は、司会の中村友美教諭（後出の「祝う会」担当）から提示された「どんな学校にしたいか」という問いに対して、次のように回答している。

生徒主体と言われて、生徒は学校改革とか色々なことを期待していると思いますが、生徒が学校に願いをぶつけるだけでは叶わないと思います。例えば校則を変えてほしくても、変えることによって生徒たちにどんな利益がもたらされるのか、学校にどのような影響があるのかを考えないといけない。そういうことを考えた上で、生徒たちがはたらきかけて、学校を変えていかないと何も変わらないなと思います<sup>(8)</sup>。

そして2016年4月23日の創立10周年記念式典では、「在校生とともに祝う会」の中で行われた「グループワーカー未来の理数インターを考える－」において、体育祭、合唱祭、宝仙祭（学園祭）などの主要な学校行事のあり方が検討され、「宝仙未来計画（提言）」がまとめられている。体育祭関係のものを一部抜粋するならば、次の通りである。

中学班：途中時点での点数を可視化してほしい。ソーラン節のやり方を変えてほしい。学年対抗の球技大会を開催してほしい。

高校班：球技大会を開催してほしい。体育祭での点数表示方法を変えてほしい。高校生もクラス別でやりたい。応援団を編成したい。中・高で別々に開催したい。冬ジャージの着

用を認めてほしい<sup>(9)</sup>。

これを踏まえて2016年6月27日の第5回実行委員会では、「生徒主体の体育祭とはどのようなものか」をめぐる、「自由討論会—体育祭のあり方について—」が行われている。そこでは、「生徒主体で動かすために、教師側がどのタイミングで補助輪を外すかが課題」、「体育祭で何をやりたいかを明確にすれば、先生方は受け入れて下さるのではないか」、「箱根駅伝のように実況放送を入れて、記録更新の見える化を図ったらどうか」、「チーム別のTシャツを作りたい」、「生徒の側で配点や競技種目を考えたい」、「先生と生徒がつながるものにしたい」などといった意見や要望が出された<sup>(10)</sup>。7月12日に、生徒たちが体育祭準備・実行委員会を自ら立ち上げており、20日の1学期終業式では、同委員長（高2男子）が、「生徒が一から決めて取り組みたい」との意向を表明している<sup>(11)</sup>。

2017年5月10日に、最初の生徒主体の体育祭が、東京体育館で開催されている（残念ながら、イベントの様子を物語る資料は見当たらない）。上記委員長は、後日このときを振り返って、次のように述べている<sup>(12)</sup>。

生徒にやれることは、生徒にやらせた方がよい。革新につながる。会場など大枠は先生が、先生が生徒を動かす場面は、生徒が動かす方がよい。次の準備委員会の役割、生徒は何をやりたいかが大事。（中略）1000人を動かせたという充実感。生徒は何でもできるけれども、何もできないという無力感。この両方を味わうとよい。いまでもあのときの自分が、あのときの濃い一日が、財産です。

また2019年3月14日に举行された2018年度卒業式の答辞では、卒業生代表が、次のように述べている<sup>(13)</sup>。

私たち7期生はさまざまな面で名をはせた学年でした。良い意味でも、悪い意味でも「理数インター史上初の……」という形容がされる学年だったのではないのでしょうか。

（中略）

そのひとつが高校2年時の体育祭です。われわれの代表

が、種目案の作成から全体の運営までを取り仕切るようになり、生徒による生徒のための行事が初めて達成できたとの評価を得ました。そのおかげで、普段の体育祭よりも2時間ほど多めに楽しむことができ、大いに聲援を買いました。しかし、生徒による体育祭運営は、その後の理数インターのさまざまな行事にも受け継がれていく、史上初の出来事だったのです。

#### Ⅳ おわりに

本稿では、子ども参加の基礎理論と学校における生徒参加の実際について論じてきた。その結果、次の二つの知見を得ることができた。このうち本稿の執筆意図に適い、新規性を主張し得るのは、言うまでもなく（2）の方である。

- （1） ハートの「参加のはしご」では、学校その他の場面で子どもの参加状況が、低次のものから高次のものまで、下段から上段に向けて、八つのステップに整理されている。
- （2） 宝仙学園中学・高等学校では、生徒主体の学校づくりが進められており、その一環として、2017年度（以降）の体育祭は、当日のオペレーションを主導することはもちろん、PDCAの一切を生徒たちが直接担うスタイルに改められている。

宝仙学園中学・高等学校の当該実践が、子ども参加にかかわる特定の権利思想や解釈によって支えられているかといえば、（おそらく）そうではあるまい。しかしそれは、ハートのモデルに照らして、少なくとも⑦、場合によっては⑧の水準にあると考えることが妥当であろう。「大人」の立ち位置が、やや不分明ではあるものの、「子どもが主体的に取りかかり」という条件は、十分に満たされているからである。

ところで宝仙学園中学・高等学校では、体育祭以外にも、生徒参加を軸とした実践が試みられているはずである。その具体的な様相が、現在、どのように出現しているのか。たとえば萌芽にせよ、



或いは道半ばであれ、何某かの動きが見られるとすれば、今後、どのように仕上がっていくのか。調査を継続することで、実証的に解明したい。

また坂本は、埼玉県志木市立志木第二中学校で校長を務めていた当時（2006年4月から2011年3月まで）、生徒参加がもたらす好循環、すなわち学校を荒れた状態から立て直すのに有効な方策であることに気づき、教職員や保護者、地域住民の協力を得ながら、実行に移していた。それについては、すでに二つの論文を発表済みであるが<sup>(14)</sup>、しかし全貌を語り尽くすには至っていない。この作業は、新たな視点から意義づけ直すことも含めて、稿を改めて行いたい。

## 注

- (1) 木村元・小玉重夫・船橋一男 『教育学をつかむ』 有斐閣 2009年 p.227.
- (2) [http://lithgow-schmidt.dk/sherry-arnstein/ladder-of-citizen-participation\\_en.pdf](http://lithgow-schmidt.dk/sherry-arnstein/ladder-of-citizen-participation_en.pdf) (2020年5月3日現在)
- (3) 小川俊介 「ニュー・パブリック・マネジメントにおけるローカル・ガバナンスのあり方について～対立型合意形成から公共経営型合意形成への一考察～」 『CUC Policy Studies Review』 No.44 千葉商科大学大学院政策研究科 2017年12月 p.38.
- (4) ロジャー・ハート著 木下勇・田中治彦・南博文監修 IPA日本支部訳 『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』 萌文社 2000年 pp.41-46.
- (5) 本多千明 「社会科教育における社会参加学習に関する一考察」 『教育学研究論集』 第9号 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻 2014年3月 pp.24-25.
- (6) (4)と同じ p.42.
- (7) 富士晴英 「＜定例セミナー講演要旨＞知的で開放的な広場―宝仙学園中学・高等学校『理数インター』のこれか

らの10年」 『私学経営』 第502号 私学経営研究会  
2016年12月 pp.51-52.

- (8) 『ピタゴラ通信』 第11号 宝仙学園理数インター父母会  
2016年4月23日 pp.6-7.
- (9) 『ピタゴラ通信』 第12号 宝仙学園理数インター父母会  
2016年10月8日 p.4.
- (10) 同上 pp.1-2.
- (11) 同日付の坂本のメモによる。
- (12) 2017年7月29日に坂本が実施したヒアリングの際の口  
述筆記録による。
- (13) 飛田祥太 「理数インターで学んだこと」 富士晴英とゆ  
かいな仲間たち 『できちゃいました！フツの学校』  
岩波書店 2020年 pp.59-60.
- (14) 坂本徳雄 「『子ども参加』に見出す希望－『四者協議会』  
による中学校改革」 『教育』 2013年11月号（No.814）  
かもがわ出版 2013年11月 pp.28-35.  
坂本徳雄 「地域における学校づくりと校長・教師の役割  
－子どもたちを真ん中に置いた学校づくり－」 白井嘉一  
編著 『学生と教師のための現代教職論とアカデミックフ  
リーダム』 学文社 2014年 pp.144-164.

## 参考文献

上述した以外の主要なものに限って列挙する。またリストアッ  
プには至っていないものの、藤田昌士の一連の論考からは、大い  
に示唆を受けている。

大江洋 『関係的権利論 子どもの権利から権利の再構成へ』

勁草書房 2004年

勝野尚行 『子どもの権利条約と学校参加』 法律文化社

1996年

喜多明人 『新世紀の子どもと学校 子どもの権利条約をどう生  
かすか』 エイデル研究所 1995年

喜多明人 「子どもの参加の権利と生徒参加史研究－戦後日本に

- おける生徒自治会形成過程の検討を中心にー」 『教育学研究』第62巻第3号 日本教育学会 1995年9月 pp.198-206.
- 喜多明人編著 『現代学校改革と子どもの参加の権利 子ども参加型学校共同体の確立をめざして』 学文社 2004年
- 齋藤忠和 「生徒による学校行事（文化祭）の創造ー前任校での生徒会を中心とする文化祭の構築・運営と、高等学校文化祭の在り方ー」 『比較文化史研究』第19号 比較文化史学会 2018年3月 pp.1-24.
- 坂本秀夫 『生徒会の話 生徒参加の知識と方法』 三一書房 1994年
- 田久保清志 「戦後日本の高等学校における『生徒参加』」 『教育科学研究』第14号 東京都立大学教育学研究室 1995年8月 pp.29-41.
- 田代高章 「『子どもの学校参加』の実践的課題ー小・中学校場面に焦点化してー」 『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第1号 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター 2002年3月 pp.19-32.
- 樽木靖夫・蘭千壽 「中学校での行事活動における成就感に関する研究ー体育祭と文化祭に焦点を当ててー」 『日本特別活動学会紀要』第24号 日本特別活動学会 2016年3月 pp.31-39.
- 長倉守 「学校経営の中核となるカリキュラムマネジメントにおける要素間の関係ー学校教育目標との関連を重視した体育祭実践を事例としてー」 『教科開発学論集』第6号 愛知教育大学大学院教育学研究科・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻 2018年3月 pp.23-33.
- 日本教育方法学会編 『子ども参加の学校と授業改革』 図書文化社 2002年
- 増山均 『教育と福祉のための子ども観 <市民としての子ども>と社会参加』 ミネルヴァ書房 1997年
- 宮下与兵衛 『学校を変える生徒たち 三者協議会が根づく長野

県辰野高校』 かもがわ出版 2004年

宮下与兵衛 『高校生の参加と共同による主権者教育 生徒会活動・部活動・地域活動でシティズンシップを』 かもがわ出版 2016年